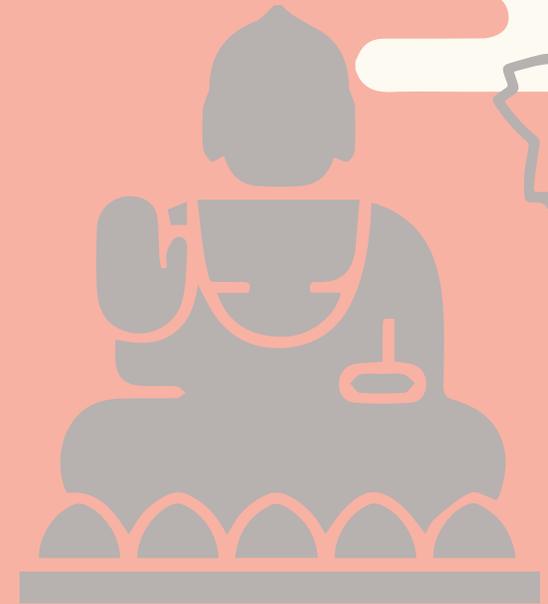
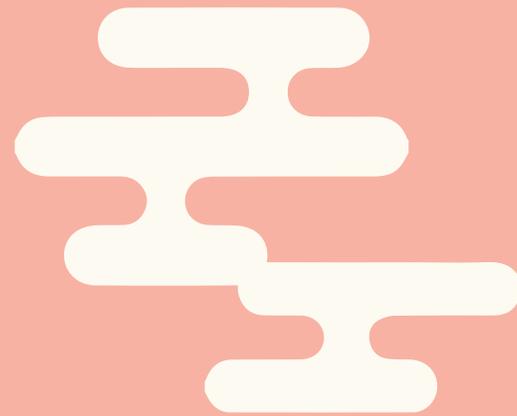
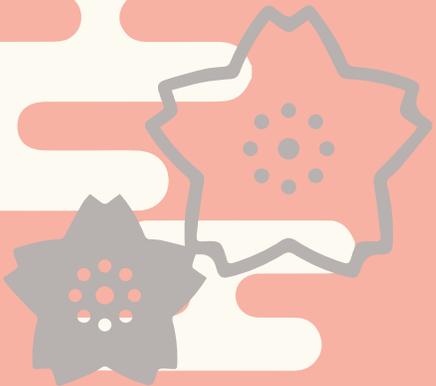
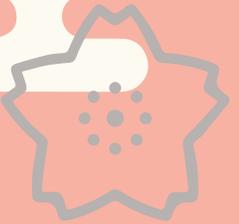
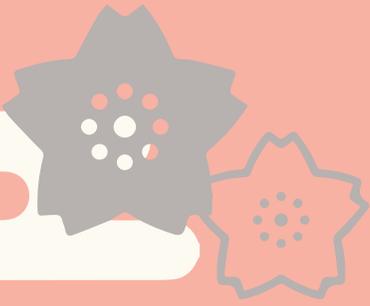


戦前期修学旅行の教育的意義に関する一考察

—修学旅行記の内容分析を通じて—

富山大学 人文学部 4年 恵良杏樹



問題の所在

戦前期を対象とした修学旅行の研究

制度的な研究が主流

法令や政策などの変遷を辿る研究

山本ほか(1976)

旅程の変遷や諸制度、学生の作文等を取り上げて分析。

修学旅行が天皇制イデオロギー教育や敬神崇拝の思想を広める役割持つことを指摘。

- ✓ 制度的な検証と受け手である学生の視点を加味して議論を行い、**修学旅行研究の基礎**となった。
- ✓ 修学旅行日記について例示する際、特に基準を定めずに、**全国の学校の記述の中から恣意的に事例を記載**している。



実際にどうやって 学生たちに需要されていたのか 捉える研究

当時の学生が残した記述を研究資料に用いて制度とその受容の両面から学校教育の在り方をより深く捉えようとする研究

荒武(2021)・松永(2012)

学生の居住地に着目して修学旅行の教育効果について論じる

- ✓ これまで等閑視されてきた、**修学旅行に参加した学生の出身地や社会的地位などの地理的・社会的属性に着目して**研究がされるようになった。

問題の所在

実際にどうやって修学旅行が学生たちに需要されていたのか捉える研究

- ✓ 修学旅行生の地理的・社会的属性の多様性に目を向けながら修学旅行の受容を検討することで、先行研究では示されていない修学旅行の教育効果が明らかに。
- ✓ 旅行者のもつ地理的・社会的属性の影響を端的に示すために、沖縄(旧琉球王国)/日本本土，台湾や朝鮮，満州といった外地(植民地)/内地などのように、地理的・社会的属性の違いが特に顕著な対象を選定したうえで内・外の二元論に陥りがち

日本本土内部における地理的・社会的属性の多様性は等閑視され、十分に議論されていない



日本本土内部における地理的・社会的属性に着目して修学旅行の受容を検討することで、修学旅行の教育効果がより詳細に明らかになるのではないか？

日本本土内部における地理的・社会的属性①

杉山(2008)

浜松都市圏東部に暮らす高校生たちによって語られた日頃訪れる場所についての語りを通じて、彼らの場所感覚を解明しようと試みた。その結果、高校生は日常的に訪れる場所に対して「都市性/農村性」の対比を常に行い、その場所を価値づけ経験していることが示された。

- ✓ 「都市性/農村性」という社会的表象が、日常的な場所感覚のなかで相対化されている
- ✓ 修学旅行：はじめて地元の外に出ることで自分が他者に観察される立場である気づきを得る。

農村部に住む修学旅行生は、修学旅行の訪問先によって「農村に住む自分」を再認識し、「都市/農村」の枠組みの中で、自己の地理的・社会的属性を相対化する。

問題の所在

日本本土内部における地理的・社会的属性②

木村(1989)

婦人雑誌の記述を分析するなかで、当時の「女性像」が一概に良妻賢母主義に基づいたものであったとはいえないと述べる。大正以降、近代化の進展に伴って「良妻賢母」像とは離れた、個人主義的な一面を備えた女性像が描かれるようになったと述べる。戦争が近づくにつれ軍国主義的な女性像へと変容していったが、特に都市部においてこれら婦人雑誌の作り出した「モガ」や「職業婦人」などの自立した女性像が広まっていったと指摘。

- ✓ 戦前期の国によって提示されていた「良妻賢母」像と実際に女性の間で共有されていた女性像との間にゆらぎが生じると考えられる。
- ✓ 近代的な状況下では、「男性/女性」という表象も多義的であった。

修学旅行の訪問先で「都市」の「新しい女性」を目の当たりにすることで、「女性としての自分」を再認識し、相対化する。

研究目的と研究対象

研究対象

「農村」部に住む女子学生の修学旅行体験記述

「都市/農村」「女性」という社会的表象の枠組みの中で
修学旅行の異文化体験を経験し、**自分自身の社会的属性を相対化する？**

研究目的

修学旅行に参加する学生の地理的・社会的属性の違いが修学旅行体験に対して持つ意味の差異を検討し、**修学旅行の教育効果**について明らかにする。

これまで、日本国内における修学旅行に参加する学生の地理的・社会的属性の違いに着目研究が行われてこなかった。日本の内外における地理・社会的な属性が違っていると修学旅行が異なる形で経験・受容されているが、これは日本国内においても言えるのではないか？

研究対象



1931年時点の鉄道網

- ・直江津から東京、青森方面へ
- ・米原から京都、大阪、名古屋へ



富山県は関東、関西に出やすい土地

**富山県の女子教育機関における
修学旅行を対象とする**

1931年の鉄道網
『新富山県』より作成

研究対象

大正元年から昭和17年までの31年間で

県立富山高等女学校：5年分
 富山市立高等女学校：10年分
 県立高岡高等女学校：20年分

修学旅行日誌を確認。



一番資料の数が多
高岡高等女学校を対象とする。

富山県内の修学旅行日誌保存状況
『ふたがみ』、『明浄』、『富山県立高等女学校校友会誌』より作成

西暦	和暦	富山県立富山高等女学校					富山市立高等女学校					富山県立高岡高等女学校					
		日程	泊数	学年	方面	資料	日程	泊数	学年	方面	資料	日程	泊数	学年	方面	資料	
1912	大正元年	10/8~11														△	
1913	大正2年																
1914	大正3年																
1915	大正4年	12/1~5	4泊5日	第三四学年	関西	○											
1916	大正5年																
1917	大正6年																
1918	大正7年																
1919	大正8年	6/3~7	4泊5日	第四学年 補修科	関西	○											
1920	大正9年	10/24~28	4泊5日	第四学年	関西	○											
1921	大正10年	5/19~24	5泊6日	第四学年	関西	○					3/21~25	4泊5日	卒業生	関東	○		
		10/6~10	4泊5日	補修科	福井石川	×					6/8~		第四学年	関西	一部		
1922	大正11年	5/2~7	5泊6日	第四学年	関東	×							不明	第四学年	関西	×?	
1923	大正12年	5/5~10	5泊6日	第四学年	関西	×	10/31~11/6	6泊7日	第四学年	関西	○	6/4~6/9	5泊6日	第四学年	関西	○	
1924	大正13年						11/7~24	7泊8日	第四学年	関西	○	5/18~24	6泊7日	第四学年	関西	○	
1925	大正14年	5/1~	不明	第四学年	関西	×	5/16~21	5泊6日	第四学年	関西	○						
												5/20~21	1泊2日	補修科	永平寺	○	
1926	大正15年 昭和元年	日誌には記述なし										5/23~29	6泊7日	第四学年	関西	○	
												5/27~28	1泊2日	補修科	七尾和倉		
1927	昭和2年	5/17~	不明	第四学年	関西	×						5/15~22	7泊8日	第四学年	関東	○	
1928	昭和3年	5/3~11	8泊9日	第四学年	関西	×	不明	不明	第四学年	関東?	○?	5/13~18	7泊8日	第四学年	関東	○	
1929	昭和4年	4/28~	不明	第四学年	関西	×	4/27~5/5	7泊9日	第四学年	関西	○	5/18~25	7泊8日	第四学年	関西関東	○	
1930	昭和5年						~5/19	不明	第四学年	関西	○	5/18~25	7泊8日	第四学年	関西関東	○	
1931	昭和6年						5/12~18	6泊6日	第四学年	関西	○	6/3~9	6泊7日	第四学年	関東	○	
1932	昭和7年						5/17~23	6泊7日	第四学年	関西	○	5/16~22	6泊7日	第四学年	関東東海	○	
1933	昭和8年	5/18~24	6泊7日	第四学年	関西	×	6/9~	不明	第四学年	関西関東	○	6/12~20	8泊9日	第四学年	関西関東	○	
1934	昭和9年						5/13~	不明	第四学年	関西関東	○	6/1~9	8泊9日	第四学年	関西関東	○	
1935	昭和10年	5/17~23	6泊7日	第四学年	関西	×						6/1~9	8泊9日	第四学年	関西関東	○	
1936	昭和11年											5/30~	8泊9日	第四学年	関西関東	○	
1937	昭和12年											6/5~	8泊9日	第四学年	関西関東	○	
1938	昭和13年											6/4~	不明	第四学年	不明	×	
1939	昭和14年	※1932年~発行されている資料にて、いくつか修学旅行記が確認できるが、どの年の記述なのかは不明。						5/22~30	8泊9日		不明	×	5/15~	不明	第四学年	関西関東	一部
1940	昭和15年						5/21~26	5泊6日		「聖地参拝旅行」		5/11~	不明	第四学年	関西	×	
1941	昭和16年											6/3~	不明	第四学年	関西	×	
1942	昭和17年											5月	3日以内	第四学年	名古屋東京	×	

高岡高等女学校について

開校当初・訓校

- 一、貞淑純良の徳性を養ひ女子の本分を守るべし
- 一、容儀を端正にし言動挙動を穩雅にすべし
- 一、学業は励むべく運動は怠るべからず
- 一、志操を堅実にし一意成業を期すべし

『高岡西高百年史』より引用

- ✓ 富山県内2つ目の女学校として1907(明治40)年に富山県高岡市に開校。

- ✓ 「**良妻賢母**」**像に倣った教育**がされていた。

1938(昭和13)年・校訓

- 一、貞淑純良の徳性を養ひ女子の本分を守るべし
- 一、容儀を端正にし言動挙動を穩雅にすべし
- 一、**学業を勉励し身体の強健を図るべし**
- 一、**儉約を重んじ勤労を尚ぶべし**
- 一、志操を堅実にし一意成業を期すべし

高岡高等女学校 施設要項より引用

- ✓ 時局の悪化とともに良妻賢母像に**身体強化や勤労奉仕の精神**などが求められるように。

高岡高等女学校について

大正7年実施の修学旅行の旅程

- 3/22 高岡駅発、名古屋駅乗り換え、宇治山田駅着
- 3/23 伊勢神宮参拝、その後奈良へ
- 3/24 猿沢池、春日大社、東大寺、大仏殿、南大門
桃山へ移動、桃山御陵、乃木神社
京都へ移動、東・西本願寺、四條通、新京極
- 3/25 北野天神、京都御所、インクライン、平安神宮、
知恩院、八坂神社、清水寺、三十三間堂
夜行列車乗車
- 3/26 高岡駅着

(『ふたがみ10号』より作成)

- ✓ 1907(明治40)年に校友会が設立。
1909(明治42)年から、校友会雑誌「ふたがみ」が毎年発行され、卒業生の投稿記事や在校生の行事、部活報告などが掲載。修学旅行記も「ふたがみ」に掲載。
- ✓ 1912(大正元)年に宿泊を伴う旅行がはじめて実施された。「修学旅行」の名前を使用して宿泊行事を行ったのは1918(大正7)年。その後は毎年関西方面への修学旅行を実施。昭和4年になると関西から関東をまたいで長期にわたった旅行が企画されるようになった。

修学旅行の実施目的

1915(大正4)年・富山高等女学校

山御陵等を巡拝して一層日本精神の涵養と国体観念の明徴とに努むるため…

『富山高等女学校一覽』より引用

1938(昭和13)年・高岡高等女学校

毎年春秋に季各学年に之を行ふ、予め旅行案を作り沿道及旅行目的地の地理、歴史、理科等の項に就きて予め教授し当日は実地観察採集等をなさしめ、帰りては作文陳列結果の処理をなさしむ

『高岡高等女学校施設要項』より引用

1940(昭和15)年・富山市立高等女学校

第四学年に於て一週間関西又は関東方面に旅行せしめ以て学習に於て養ひ得たる所を拡大すると共に祖国日本に対する認識と情感とを充足せしめんと期す。而して旅行中は班を作り班長を定めて集合解散等之を単位として行動せしむ

『富山市立高等女学校 学校要覧』より引用

- ✓ 天皇制イデオロギー教育や敬神崇拝の思想を広める
- ✓ 地理や歴史の学術的な学びを得る

修学旅行記述—皇室関連



1927(昭和2)年
明治神宮にて

広い参道は綺麗な小砂利がしきつめられ、緊張した気分であたりをこめている、靴の音がなんとなくつかしい。

神域は鬱蒼として崇厳なる雰囲気は自ら襟を正せる。真心こめて神前にぬかづき宝物殿を拝殿する、大帝の御質素さに胸をうたれた私達は、外苑を見て、

(ふたがみ19号)

ザクザクと綺麗に、しきつめられた石を踏み、人民の真心こめた献木が、鬱蒼と茂る中を私達は厳かな気にうたれつつ、やがて古めかしい白木造りの神殿の前に出る。世界の大帝、明治天皇、代々木の森の代々としへに仰ぎ奉る大帝、敬虔な気におそはれて宮居に額づけば、何処とも知らず薫香ただよいて汚れたる心が清められて行く。参拝を済まして神前にて記念の写真を撮る。

(ふたがみ25号)



1933(昭和8)年
明治神宮にて

明治神宮の場合

- ①「綺麗な白砂利」がしきつめられている様子
- ②砂利を踏みしめる音だけがあたりに響き，静かな様子
- ③緊張感が漂う様子
- ④木々が生い茂り日の光が入らない蔽かな，神々しさ
- ⑤「自分から」襟を正してしまった様子
- ⑥明治天皇のことを想って礼拝を行う様子

明治天皇の威光を表象している場所
として意味づけられている。

+

形式的な表現で示されている



明治神宮の**明治天皇をの威光を
想起させる場所**としての意味は
高岡高等女学校の中での共通認識

修学旅行記述—皇室関連



1934(昭和9)年
皇居にて

時あたかも非常時にして、内外共に国事多端、考えれば考える程、なんだか胸にせまって、**此処にいるこの我々は、何時何時までも陛下の下に一致協力、此国を固く守りますと誓わずにはいられなかった。**
(ふたがみ26号)

日頃雨が降っても風が吹いても欠かさず朝の清い心もて 両陛下の御安泰をお祈りする皇居遙拝。それが今私達は畏くも大君の大前に額いているのである。**ああ、私も日本人。九千萬同胞の一人である。喜びが感激が胸を浸す。私の様な者でも何か御国の為に立ちますように――。**

(ふたがみ27号)



1935(昭和10)年
皇居にて

✓ 戦争が近づくと「聖地」としての意味合いが強くなる

修学旅行記述—都市・農村



1924(大正13)年
大阪にて

立止り電車でも自動車でも十間も前方から来るのを待って除けて通るので始終列が切れる追ひつこうと駆走りをなすので田舎風を丸出し笑ひの種となる。併し中には名古屋ですか、京都どですか、と聞く人もある。きっと校服がいいのだろう。悪い気持はしない。さう言う時は化の皮を剥がすと大変と早速標準語と来る。然し何か綺麗な物があると邊に誰が居らうと構はず「アッチャー、アー」と田舎振りを丸出し
(ふたがみ16号)

- ✓ 都会の喧騒や交通量の多さに慣れない様子や、見慣れないものを見かけると感嘆符をあげてしまう様子を「**田舎者**」と表現。
- ✓ 「**都会人**」になりきらねばならないといういけないという意識

修学旅行記述—都市・農村



1934(昭和9)年
東京にて

銀ブラも、想像した程よくはなかった。いろんな人が通る。紳士も淑女も学生も……だが人の注目の的になるのがいやだった。いくシュツシュツとすまして歩いてはどうしてわかるのか、「田舎の女学生だね、」と私話いて行くのが本当ににくらしかった。やはり高岡の町を父母と買物に出るのがよほど楽しい様に思われた。

(ふたがみ26号)

食堂車になんか入った事のない田舎者の眼はむさぼるように其の表の上を走った。「行ってこようかしらん」「でも又恥をかくのじゃ、ないかしらん」「行ってらっしゃいよ、旅の恥はかき捨てじゃないの、かまうもんですか」首をかしげる中に夕刊に23人の人が行った

(ふたがみ25号)



1933(昭和8)年
鉄道内にて

- ✓ 「田舎者」として視線を集める自分を恥ずかしいものとして捉える者も、旅の楽しい思い出として捉える者もいた。

「田舎者」 = 多義的に使われている

修学旅行記述—都市・農村



1933(昭和8)年
東大寺にて

つと顔を上げると頭上に円満な御顔がある。高岡の大仏殿を見慣れている眼には此の世界の大仏様はあまり大きく思われない。皆不平そうに「高岡の大仏様の方が此処のよりずっと大きいわ」と口々にこぼす。事実どうしても小さい様な気がしてならない。そして高岡のは慈悲深い柔和な顔をしていらっしゃるのに此の大仏様は円満な御顔ながらいかめしく目をむき立ててござる。じっと見つめていると何だか怖くなるのですぐ視線をそらしてしまう。

(ふたがみ25号)

- ✓ 1933(昭和8)年以降に高岡大仏が建立してから、鎌倉・奈良にて「高岡大仏の方がよい」「高岡大仏と同じくらい」という記述が見られる
- ✓ 旅行先で地元を想起するときは、必ずしも「田舎者」としての恥ずかしい体験をした、という文脈だけではなく、「**地元の方がよい**」という文脈でも想起。

「都会/田舎」「見学地/地元」という二つのまなざしで修学旅行の訪問先と自分の地元を相対化。「地元」や「田舎」に対して抱く感想は十人十色。

修学旅行記述—女性



1931(昭和6)年
東京にて

時々買物をしている西洋の人に注目した。彼等は見ているとなんだか日本人の女より少々レベルが上にある様に考えられた。なぜなら西洋の夫人がハンドバッグを買うのに止める時はさっさとやめて 実にさっぱりしていた。然るに或種の日本の女はどうであろうか。なんだか買わねばすまないと言う変な責任観念なるものを呼び起こして unnecessaryなものまで求めるんじゃないだろうか

(ふたがみ23号)

しばらく進むと、水槽の横面からガラスを透して凄艶な海女実演があった。すんなりとした四肢を思うままにのぼして海中をもぐる此の地方の女性の特命である尊くも勇敢な職業よ、あの自由に動き回る指先になよやかな身体にもやっぱり澆刺とした新日本の意気が躍動しているに違ない。

(ふたがみ22号)



1930(昭和5)年
三重にて

数が少なかったものの、高岡に日々暮らしているだけでは体験することができない

「都市」の「女性」との出会いによって女性としての自分を相対化し、
憧れの女性像やそのという字の女性の問題など、人それぞれに異なる感想を抱くこともあった。

「農村」部の女学校における修学旅行の実施目的

- ✓ 天皇制イデオロギー教育や敬神崇拝の思想を広めるため。
- ✓ 地理や歴史科目の教養を深めるため。

「農村」部の女学校における修学旅行の教育効果

- ✓ 「聖地」として存在している施設をまわることで「天皇のために」という意識感を再認識する場として修学旅行の訪問地が機能。天皇制イデオロギー教育や敬神崇拝の思想が養われた。
- ✓ 修学旅行を通してはじめて地元の外に出たことで、自分たちが観察される対象であると気づき、「農村」「地元」に住む自分、「女性としての自分」という社会的属性を相対化し、地元や女性観を俯瞰してみる力が養われた。

天皇制イデオロギー教育や敬神崇拜の思想を広める効果

- ✓ 天皇の関連施設を訪れた際の記述のされ方が形式的
- ✓ 学校から教えられた情報をそのまま記述したり、何かの文章を参考にする形で記述したりしたこと等原因が推測。
- ✓ しかし、齊藤(2015)が指摘するように、日誌は検閲されていたものであるため、どこまでが学生の自分自身の意志で記述されていたのかは分からない。

地理的・社会的属性の差異によって生まれた効果

- ✓ 当時の女性：女性は家父長制を支える家庭内の役割を果たすべきとされた(姜華(2022))。
- ✓ 「男性/女性」の関係：「主/従」「保護/依存」の関係→当たり前になっていた
- ✓ 修学旅行の中ではじめて「都市」の「新しい女性像」を表象するような女性と出会っても、女性としての在り方等に対して具体的に言及する記述が少ないのは、このためであると推察できる。

考察と結論

- ✓ 修学旅行に参加する学生の「都市/農村」「女性」という社会的属性に着目したとき、修学旅行の教育効果は、学校が設ける修学旅行の実施目的から外れた教育効果がみられた
- ✓ 以上のことより、今後の修学旅行の研究では、**地理的・社会的属性の違いによって修学旅行の受容と教育的意義がどのように変化するのか、という、参加する学生個人の背景にまで焦点を当てたミクロな議論をしていく必要がある。**

参考文献

- 荒武達朗 2021. 修学旅行日記の時代：1927年徳島商業学校満鮮への旅. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究. 29
- 木村涼子 1989. 婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容 大正デモクラシーから敗戦まで. 教育学研究. 56:331-341
- 齊藤俊彦 2015. 『学校文化の史的探究：中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』一般財団法人 東京大学出版会.
- 杉山和明 2008 都市近郊農村における若者の場所感覚：浜松都市圏東部に暮らす高校生の語りの分析から. 63:239-259
- 成田龍一 2006. 空間論と歴史研究. 水内俊男編『シリーズ＜人文地理学 8 歴史と空間』pp 117-136 朝倉書店.
- 富山新聞社報道局 1984. 『菊友薫りて』富山新聞社
- 富山県教育史編さん委員会 1971. 『富山県教育史 上巻』富山県教育委員会.
- 富山県教育史編さん委員会 1972. 『富山県教育史 下巻』富山県教育委員会.
- 富山県立高岡高等女学校 1917～1941. 『ふたがみ』10～32. 富山県立高岡高等女学校
- 富山県立高岡高等女学校 『高岡高等女学校 施設要項』
- 富山県立高岡西高等学校創立百周年記念事業実行委員会 2007. 『高岡西高校百年史』富山県立高岡西高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
- 松永歩 2012. 地理的想像力の醸成と沖縄師範学校の修学旅行 日琉同祖論の一前提 ――. 政策科学. 19:225-240
- 山本信良, 今野俊彦 1976. 『学校行事の宗教的性格』新泉社
- 姜華 2011. 修身教科書に見る良妻賢母教育の実際とその特質 明治後期を中心にして. 早稲田教育評論. 25:89-106
- 姜華 2022. 『高等女学校における良妻賢母教育の成立と展開：教育理念・修身教科書・学校生活の総合的研究』東信堂.